

信濃金盃

新野の
祐子

夏の朝アイゼン履いて獣めく

青鹿あおの骸雪溪せきの険語りおり

雪溪せきに浮かぶ奇岩きがんを躁そうという

あの奇岩きがん目指せばはたた神起かみきぬ

信濃しなの金盃きんぱい小暗こくらき胸むねを照らしけり

みな誇ほらかに飯い豊い嶺ねのお花畑はなばた

夏霧なつぎりよ晴はれないで今撒骨まぼねす

道みちに迷まよい琴弾ことひき鳥どりに囃はされる

さびしらの絶たえぬ稜線りやうせん星鴉せいや

送り梅雨つゆほろろ身ぬちの澱洗せきせんう